

ピップの期待とディケンズの期待

水野 隆之

—

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens,1812-70)の『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61)が週刊誌連載の長編小説として書かれた背景には、主に二つの要因があった。一つは、この時期ディケンズは自らが編集をしていた週刊誌「一年中」(*All the Year Round*)に自分の子供時代を題材にしたエッセイを幾つか書いていたが、その中のある小品を執筆しているうちに、「新奇でグロテスクな構想」(1)が浮かび、それを長編小説に発展させたいという欲求に駆られたことである。そしてもう一つは、もっと現実的な要因であった。ディケンズは当初この小説を月刊分冊の形式で発表するつもりでいたのだが、「一年中」の売りが低下したため、それを挽回する必要に迫られた。そこでディケンズは予定を変更して、『大いなる遺産』を「一年中」に連載する形をとったのである。いわば急場を凌ぐ形となった訳だが、ディケンズはこの小説を書くにあたり、この十年程前に書いた『ディヴィッド・コパフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50)を多分に意識したという。

この小説は終始一人称で書かれますが、最初の三週間分で、主人公がディヴィッドと同様、男の子なのがお分かりになるでしょう。(中略)無意識に繰り返しに陥っていることがないのを十分確かめるために、先日『ディヴィッド・コパフィールド』を読み返してみ、あなたには殆ど信じられない位に感動を覚えました(2)

確かにこの二つの小説は、一人称の語り手が自らの人生を回想する形で物語が進行する。しかしその内容、語り手が醸し出す作品の雰囲気はと言うと、「繰り返しに陥っている」どころか、全く異質なものとなっている。ディヴィッドは人生に成功した人間として、様々な困難を乗り越えた後、最終的に幸福を手に入れるのに対して、ピップ(Pip)は紳士になってエステラ(Estella)と結婚するという夢を叶えることが出来なかった。ピップはいわば人生に失敗した人間である。そして二人の人生の顛末もさる事ながら、二人の生き方もまた非常に対照的と言える。ディヴィッドには例えば次に挙げる引用が示すように、自分の目の前に立ちはだかる困難を努力と勤勉で切り抜けようとする確固たる意志がある。

私がすべきことは子供時代の厳しい躰を生かし、毅然とした確固たる心をもって働くことであった。私がすべきことは手に斧を持って、困難の森を切り開き、木々を切り倒してドーラ(Dora)の元へ行き着くことであった。私は早歩きをし続けた。まるで歩くことでそれが達成されるかのように。(3)

しかしながらピップは、「僕は自分が出世するために何もしてこなかった」(4)と自ら認めてい

るように、幸せになりたい、紳士になりたいと願いはするものの、自分ではその願いを実現させるための努力は何もせずに、ただ自分に幸運が巡ってくることを期待するだけである。果たしてこの二人の違いはディケンズが言うように、繰り返しの避けようと彼が意識したことによるものなのか。あまりにも違いすぎる二人の結末を読み比べてみると、ディケンズの言葉を真に受けて、この相違は彼が意識した結果によるものと結論づけることに私は些か疑問を感じる。そこでこの小論ではこの二つの小説の違いは仮にディケンズの意識が働かなくとも生まれていたのではないかという視点に立って『大いなる遺産』とディケンズとの関わりを考察し、二つの小説の違いは、『大いなる遺産』が小説執筆時のディケンズの人生観を微妙に反映していることに起因するのではないかということ論じていきたいと思う。

二

そもそもディケンズが『ディヴィッド・コパフィールド』を意識した理由は、彼がピップに自己を投影しようとしたからである。ディケンズは『ディヴィッド・コパフィールド』に関してジョン・フォスターに次のような手紙を送っている。

「事実と虚構とを非常に複雑に入り組ませて、かなり巧妙にそれを仕上げたと私は思います。」(5)

ディヴィッドの経歴はディケンズの経歴とほぼ重なる。『ディヴィッド・コパフィールド』がディケンズの自伝的小説と言われる所以である。そして『ディヴィッド・コパフィールド』と同様、『大いなる遺産』においてもディケンズに自分の人生を振り返り、それを題材に小説を書きたい衝動があったと考えられる。そのような衝動に駆られた理由は二点挙げられる。一つは『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-53)や『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*, 1855-57)といった所謂「社会小説」を書いた後、ディケンズの関心が社会問題から、より個人的な事柄へと向かっていったことである。例えばピーター・アクロイドは、「一年中」の記事にはそれ以前の週刊誌「家庭の言葉」(*Household Words*)のそれよりも政治的・社会的要素が少なくなったと指摘し、その理由としてディケンズ自身の政治的・社会的関心が薄れていったためとしている。(6)そして社会問題を扱った小説・エッセイを書いた後、冒頭でも述べたように、ディケンズは子供時代の思い出をモチーフにしたエッセイをこの時期発表することとなる。もう一つは後に詳述するが、ギャズヒル・プレイス(Gad's Hill Place)購入や離婚といった人生の転機となる出来事が起きたことである。このような事情が重なり、ディケンズは自身の人生を題材とした小説を書こうと思い立った。そこで彼は自伝的要素を色濃く反映した『ディヴィッド・コパフィールド』を意識したのである。そしてディヴィッドがディケンズの分身であったように、ピップもディケンズの分身であったのだ。例えばマイケル&モリー・ハードウィックは次のように述べている。

彼は心の中で自分とピップを同一視していたことは間違いない。意義深いことに彼は彼にとって最も大事な地に物語を設定した。そこに彼は何十年と経った後、再び根をおろしたのであった。(7)

「彼にとって最も大事な地」とはケント州チャタムのことである。そして『大いなる遺産』においてピップの子供時代の物語はケント州周辺を舞台に展開する。ディケンズはこの土地で四歳から九歳までの約五年間暮らした。この時期はディケンズが最も幸せだった時代とされ、ジョン・フォスターによるとチャタムは「彼の想像力が生まれた地」(8)であり、ディケンズの精神が深く根ざした地と言える。このチャタム時代に関するエピソードの中であまりにも有名なものが一つある。それは父親に連れられてある邸宅を目にしたことであった。

ロチェスターとグレイヴズエンドの間の街道が最も高くなっている所に、ギャッツヒル・プレイスと呼ばれている家が建っている。そこが彼の住居になるずっと以前から、我々は何度となくそこを通り過ぎたことがあった。この家を私が初めて彼と一緒に見た時、彼はある話をしたのだが、その後もここを通る度に必ずそのことに言及したものだ。その話とは、子供の頃にまつわる思い出の中でもこの家は特別であったということ、というのも、父と一緒にチャタムからやって来て、初めてこの家を見て、非常に感嘆してその家を見上げた時、一生懸命働きさえすれば大人になった時、その家がそれと同じような家に住めるようになると父が請け合ってくれたということだった。長い間それが彼の野心の対象となったのであった。(9)

その後も少年ディケンズは何度か一人でギャッツヒル・プレイスを見に出かけたという。ディケンズ自身「私の子供時代の夢」(10)と語っていたように、ギャッツヒル・プレイスがディケンズの「期待」、いつか手に入れたいという「野心の対象」となったのである。そしてその約四十年後の一八五六年、たまたまギャッツヒル・プレイスが売りに出されることを知ったディケンズはそれを購入し、子供の頃の夢を叶えたのであった。それだけギャッツヒル・プレイスはディケンズの心から離れることがなかったのである。そして『大いなる遺産』の着想が浮かび、この小説を執筆したのもこの邸宅に於てであった。子供の頃に芽生えた夢を実現させた時、ディケンズの関心が個人へと向かったのは当然といえば当然であろう。

三

ところでディケンズがギャッツヒル・プレイスに憧れたように、『大いなる遺産』の主人公ピップもサティス・ハウス(Satis House)と呼ばれる家に魅せられていた。ピップは姉と彼女の夫で鍛冶屋のジョー(Joe)の三人で暮らしていた。彼はジョーを慕い、いつしか自分もジョーのような鍛冶屋になりたいと考えるようになった。しかしある日ピップはサティス・ハウスでエステラに出会い、彼女に自分のみすばらしい身なりを馬鹿にされる。その時からピップの心

の中に紳士になりたいという願望が生まれた。サティス・ハウス訪問がピップに変化をもたらしたのである。それからのピップは鍛冶屋の徒弟という運命を受け入れることが出来ずに、悶々とした日々を送る。そんな時ピップに遺産相続の話が転がり込んできた。すると彼は遺産の贈り主はサティス・ハウスの女主人ミス・ハヴィシャム(Miss Havisham)だと早合点する。

彼女はエステラを養女にした。彼女は私を養子にしたも同然である。そして私たち二人を結びつけるのが彼女の意図に違いない。彼女は私とその荒れ果てた屋敷を修復し、真っ暗な部屋に日光を入れ、時計を動かす、冷たい暖炉に火を燃やし、蜘蛛の巣を払い、害虫を殺し、つまりロマンスに出てくる若い騎士の輝かしい偉業を全部やり遂げて王女と結婚するように運命づけたのだ。通りすがりに立ち止まってその屋敷を眺めた。焼けこげた赤い煉瓦の壁、鎧戸の閉まった窓、丈夫な老人の腕のように、小枝やつるを煙突にまでからませている緑の力強いツタは、豊かで魅力的な神秘的ドラマを作り出していた。そして私はその主人公であったのだ。(11)

遺産は実はピップが子供の頃に食べ物を恵んだ流刑囚マグウィッチ(Magwitch)から贈られたものであった。それをミス・ハヴィシャムからだと思い違いをしたことからピップの悲劇が生じる訳だが、遺産相続とサティス・ハウスを結びつけたピップに関してF・S・シュウォーツパークは次のような指摘をしている。

彼はエステラと結婚し、同時にその家を所有することになると固く信じている。このことはピップにとって自分の隠された恥と罪を拭き去る唯一の方法に思えるのである。彼の罪と同じ位彼にとって欠くべからざるものは、それから逃れたいという衝動である。そしてサティス・ハウスはそうするために自分が持たねばならぬものと彼は考えるのだ。(エステラはピップにとってその家自体程、重要ではない。彼女はただサティス・ハウスを完全なものにするだけなのだ。)(12)

シュウォーツパークが言うようにピップにとってエステラよりもサティス・ハウスの方が重要であったかどうかはともかく、サティス・ハウスでエステラと暮らすことがピップの「期待」となり、彼がサティス・ハウスを手に入れることに固執していたのは確かだ。ディケンズにとってギャズヒル・ブレイスが自分の野心の対象となったように、ピップにとってサティス・ハウスに有り付くことが人生の最終目的となったのである。

ではディケンズがギャズヒル・ブレイスとサティス・ハウスをどの程度同一視していたかどうかである。サティス・ハウスはレストレーション・ハウス(Restoration House)と呼ばれた、やはりケント州に実在した家をモデルにしたと言われている。(13)しかしそれはあくまでも建物の外見上の構造をモデルにしたに過ぎないであろう。そしてディケンズ自身はその家に対して憧れというような特別な感情を持っていなかった。ある家に対する思い入れという点で、サティス・ハウスとギャズヒル・ブレイスを結びつけるのはそう不自然ではないだろう。

ディケンズもピップもいつかは憧れの家を手に入れたいと「期待」していた。そしてこの「期待」は二人とも周囲の人間によって植え付けられたものであった。ディケンズの場合は父親が「請け負ってくれた」のであり、一方ピップの場合は姉やパンブルチュック(Pumblechok)がミス・ハヴィシャムはピップに「何かしてくれるだろう」(14)と考え、ピップはその何かをエステラとサティス・ハウスで暮らすことと独り決めたのだった。因みにこの小説の原題である‘*Great Expectations*’の‘*expectations*’には文字通り「遺産相続の見込み」という意味のみならず、ピップの大いなる「期待」という意味も含まれているのである。

更にギャズヒル・ブレイスとサティス・ハウスを直接結びつける共通点を敢えて挙げるとするならば、それはそれぞれの家の所有者であった人物の職業である。サティス・ハウスにはビールの醸造所の跡があり、それはミス・ハヴィシャムの父がかつて経営していたものであった。一方ギャズヒル・ブレイスは、一七七九年オルダマン・トーマス・スティーヴンズ(Alderman Thomas Stevens)という人物によって建てられた。そしてこのスティーヴンズはビールの醸造業をしていたのである。この点で二つの家の歴史が結びつく。尤も、これは単なる偶然の一致かもしれない。しかしディケンズが無意識のうちに結びつけたとも考えられよう。少なくとも精神的なレヴェルで、つまり憧れの対象という意味でこの二つの家は共通していると言ってよい。

四

ディケンズもピップも成功の証として憧れた家を手に入れたいと望んだ訳だが、実際ギャズヒル・ブレイスを所有出来たディケンズと違って、ピップはサティス・ハウスを射止めることは出来なかった。ここが『ディヴィッド・コパフィールド』と大きく異なる点である。ディヴィッドは継父の虐待、児童労働といった辛酸を嘗めた後、不屈の精神で努力し、最終的には幸せを手に入れることができた。しかしこれは寧ろ作者ディケンズがディヴィッドを幸せにしたと言った方がよいだろう。例えばディケンズの妻キャサリン(Catherine)がモデルとされるドーラとディヴィッドは結婚するが、幼稚なドーラに手を焼くと、ディケンズはドーラを病死させ、ディヴィッドを理想的な女性アグネス(Agnes)と結婚させる。あたかもディケンズが日常生活の不満を小説の中で解消しているかのよう、最後には全てがディヴィッドに都合よく働くのである。しかし『大いなる遺産』にはこのような楽観的な側面は微塵もない。ピップの期待は尽く裏切られてしまうからだ。ピップが相続する遺産はマグウィッチの帰国により全額没収される。ここで現実的にピップが紳士となる道は閉ざされてしまう。そしてほぼこれと時を同じくして、エステラは結婚し、ミス・ハヴィシャムは死亡する。そしてこの小説の結末ではサティス・ハウスは取り壊される。つまりピップの理想の上での期待も完全に消えてしまうのである。

では何故ディケンズはピップに不幸な運命を与えたのか。この点を論じるにはその当時のディケンズの置かれていた状況を考慮する必要があるだろう。一八五〇年代のディケンズは一言で言えば「幸せではなかった」(15)。とりわけ彼は家庭を巡って様々な悩みを抱えていた。

一八五八年ディケンズは妻キャサリンと離婚をしている。またなかなか定職に就かない子供たちの将来のことで彼は色々と気をもんでいた。そして彼を悩ませていたのは家庭の問題だけではなかった。彼の交友関係にもこの頃変化が見られる。長年の友人として彼に創作上のアドバイスをしてきたジョン・フォースターと次第に疎遠になっていったのも、挿し絵画家として彼の小説に役を買っていた「フィズ(Phiz)」ことハプロット・ナイト・ブラウン(Hablot Knight Browne)と袂を分かったのもこの時期である。そしてディケンズは一八五〇年代後半に公開朗読を行ったが、その動機は小説以外の収入源を確保することだけでなく、彼が「我を忘れ、苦痛を忘れることが出来るものを必要としていた」(16)からでもあった。ギャズヒル・プレイスを購入し、子供の頃の夢を叶えて一見幸せそうに思えたこの時期は、ディケンズにとって悩み多き時でもあったのだ。彼は「私は評判も上がり金も出来た。家庭の幸福にも不足はない」(17)と語るディヴィッドと同じ心境にはなれなかったのである。なぜなら評判は上がり金も出来はしたが、家庭の幸福には不足していたのだから。つまりギャズヒル・プレイスは人生の成功を保証してくれなかったのである。ディケンズが『大いなる遺産』を書こうと思いついた時に浮かんだ「新奇でグロテスクな構想」の核心はここにあるのかもしれない(18)。ひょっとしたらギャズヒル・プレイスを見なかった方が良かったのかもしれないという思いがピップの言葉に表現されているのだ。

五

ロンドンで紳士になるべく修業 と言ってもピップはただ金を浪費する生活をしているだけなのだが をしているうちにピップは実体のない生活に不安を覚え、ジョーとの生活を懐かしむようになる。

夜中に キャンピラのように 目を覚ますと、自分はミス・ハヴィシャムの顔など一度も見ずに大人になってあの懐かしい正直な鍛冶屋でジョーの相棒になることに満足していた方がずっと幸福だったろうにと考えて、憂鬱になることがあった。夕方、一人腰掛けて炉の火を眺めていると、結局我が家の鍛冶屋の火や台所の火が一番いいのではないかと思うのであった。(19)

そして遺産の贈り主がマグウィッチと判明し、さらに自分がエステラと結婚出来ないと悟ると、サティス・ハウスを見ることがなかった方がよかったのではないかという疑念は確信へと変わる。

私は顔と手から天候や旅の垢を洗い落とし、忘れ得ない古い屋敷へと向かった。決して足を踏み入れることも、目にすることもなかったら私にとってどんなに良かったかもしれないあの古い屋敷へと。(20)

ピップが日々の生活に幸福を感じていたのは、彼がサティス・ハウスに行く前日までであった。サティス・ハウスでの体験から抱き始めた期待が完全に外れてしまったピップの喪失感がこの告白に込められている。他方、ギャズヒル・プレイスを手に入れたディケンズもピップと同じ喪失感を抱いていたのではないだろうか。ディケンズにとってギャズヒル・プレイスは「成功した人間に相応しい報酬」(21)であった。子供の頃父に植え付けられた期待を実現すべく彼は勤勉に努力し、作家として名声を得ることが出来た。しかし念願を果たしてギャズヒル・プレイスを手に入れた時、彼の生活は必ずしも幸福と言える状況ではなかった。思い描いてきた理想と現実とのギャップを感じたディケンズは自分の人生の成功を疑問視していたのではないだろうか。成功するはずと期待してきたが実はそうではなかったのではないか、そして自分の努力が実は徒労に終わってしまったのかもしれないと。それが『大いなる遺産』において何の努力もしないピップの形となって表現されているのだ。

先に‘expectations’の二重の意味について述べたが、この小説の中で「期待」を持っている人物はピップだけではない。H・M・ダレスキイも指摘しているようにマグウィッチやミス・ハヴィシャムといった人物もそれぞれ「期待」を抱いている。(22)そして彼らの期待は全て裏切られるのである。『大いなる遺産』は、期待と現実がそれに反する結果に終わったことへの失望で溢れている。これこそ子供の頃から抱いてきた期待が外れてしまったディケンズの失望感の表れではないか。そして失望感溢れる小説を書くことはディケンズにとって耐え難い苦痛であったに違いない。『大いなる遺産』執筆中彼は絶えず顔面神経痛に悩まされていたが、作品を書き終わると痛みはすぐに消えてしまったという。(23)時に悲しみに打ちひしがれ、後悔の念を滲ませながら語るピップがディケンズの精神的分身であったことの象徴であろう。

『大いなる遺産』は当時のディケンズ自身の人生に対する錯綜とした感情を反映した小説であり、「ディケンズの幻滅の時代」(24)に書かれた小説である。それ故、作家として「頂点に達して」(25)、成功を享受していた時期に書かれた『ディヴィッド・コパフィールド』と違って当然なのだ。尤も、この二つの小説には象徴的な意味で共通点もある。それは決して表に出ることのなかったディケンズの本心が語られていることだ。書簡などを見る限り、ディケンズはギャズヒル・プレイスそのものへの不満はそう述べてはいないし、友人にも是非ギャズヒル・プレイスを訪問して欲しいと招待したりしている。しかしサティス・ハウスに執着したピップと同様、ディケンズも心の奥底ではギャズヒル・プレイスに執心したことへの自責の念に駆られていたのではないだろうか。この自責の念こそが『大いなる遺産』で語られるディケンズの隠された本心であろう。ちょうど『ディヴィッド・コパフィールド』において決して公言することのなかった労働体験を語ったように。

註

- (1) John Forster, *The Life of Charles Dickens*, 2vols (London: The Waverley Book Company, 1911), vol.2, p.318.
- (2) Graham Storey, et. al. ed. *The Letters of Charles Dickens*, 11vols. (Oxford: Clarendon Press,

- 1965-), vol.9, p.325.
- (3) Charles Dickens, *David Copperfield* (The Oxford Illustrated Dickens; Oxford: Oxford University Press, 1994), p.520.
 - (4) Charles Dickens, *Great Expectations* (The Oxford Illustrated Dickens; Oxford: Oxford University Press, 1994), p.235.
 - (5) John Forster, *The Life of Charles Dickens*, vol.2, p.55.
 - (6) Peter Ackroyd, *Dickens* (London: Minerva, 1991), p.899.
 - (7) Michael and Mollie Hardwick, *Dickens's England* (London: J. M. Dent & Sons Ltd, 1976), p.128.
 - (8) John Forster, *The Life of Charles Dickens*, vol.1, p.12.
 - (9) *Ibid.*, vol.1, p.5.
 - (10) *The Letters of Charles Dickens*, vol.7, p.531.
 - (11) *Great Expectations*, p.219.
 - (12) F. S. Schwarzbach, *Dickens and the City* (London: Athlone Press, 1979), p.188.
 - (13) John Forster, *The Life of Charles Dickens*, vol.2, p.242.
 - (14) *Great Expectations*, p.64.
 - (15) Peter Ackroyd, *Dickens*, p.747.
 - (16) *Ibid.*, p.846.
 - (17) *David Copperfield*, p.866.
 - (18) 因みにジョン・フォスターはこの「新奇でグロテスクな構想」をピップとマグウィッチの関係と解釈している。 John Forster, *The Life of Charles Dickens*, vol.2, p.319.
 - (19) *Great Expectations*, p.258.
 - (20) *Ibid.*, p.339.
 - (21) Peter Ackroyd, *Dickens*, p.761.
 - (22) H. M. Daleski, *Dickens and the Art of Analogy*, (London: Faber & Faber, 1970), p.251.
 - (23) Peter Ackroyd, *Dickens*, p.951.
 - (24) Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (London: Martin Secker & Warburg, 1970), p.271.
 - (25) ジョン・フォスターはディケンズの伝記中、一八四七年から一八五二年までを扱った第六巻に「頂点に達して(At the Summit)」というタイトルをつけている。 John Forster, *The Life of Charles Dickens*, vol.2, p.393.